二〇二三年度
入学試験

国語

一回（二月一日）　富士見中学校

注意事項

(1) 問題は1ページから23ページまであります。
(2) 問題にページ不足や印刷の良くないところがあれば、すぐに手をあげて、監督（かんとく）の先生に伝えてください。
(3) 解答はすべて解答用紙の定められた場所に、指示通りに記入してください。
(4) 句読点等は字数に数えて解答してください。

一

次の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。

① 祭りのジュンビをする。
② 西郷さんのドウゾウを見に行く。
③ フンマツのジュースを水に溶かす。
④ ヨネンがなく遊ぶ。
⑤ ネンショウする様子を観察する。
⑥ キフジンの描かれた絵画を見る。
⑦ コートのウラジに名前が縫い付けてある。
⑧ キショウ予報のニュースを見る。
⑨ 幼いころは出来がよく、シンドウとほめそやされた。
⑩ 成長につれて自我がメバえる。

（問題は次のページに続きます。）

二

現代の日本社会は、物質的な豊かさの達成や機械技術の進歩などによって、一人で生きやすくなる条件が整いました。次の文章は、その説明に続く部分です。これを読み、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文の小見出しは省略してあります。

「一人」になれる条件が整い、人びとの選択や決定が尊重されるようになった社会では、さまざまな物事を「やらない」で済ませられるようになります。①ある行為を「やらねばならない」と迫る社会の規範は緩くなり、何かを「やる」「やらない」の判断は、個々人にゆだねられます。

この傾向は人間関係にも当てはまります。私たちが生きる時代は、閉鎖的な集団に同化・埋没することで生活が維持されてきたムラ社会の時代と違います。生活の維持は、身近な人間関係のなかにではなく、お金を使って得られる商品やサービスと、行政の社会保障にゆだねられるようになったのです。

このような社会では、誰かと「付き合わなければならない」と強制される機会が、徐々に減っていきます。会社やクラスの懇親会への参加はもはや強制される時代ではありません。地域の自治会への加入も任意性が強くなりました。趣味のサークル※を続けるか続けないかは、まさに「人それぞれ」でしょう。

誰と付き合うか、あるいは、付き合わないかは、個々人の判断にゆだねられています。俗っぽく言えば、私たちは、（嫌な）人と無理に付き合わなくてもよい気楽さを手に入れたのです。

今や、人と人を結びつける材料を、生活維持の必要性に見出すことは難しくなりました。②人と人を結びつける接着剤は、着実に弱くなっているのです。

では、③＿＿＿＿＿＿このような社会で、つながりを維持するにはどうすればよいのでしょうか。生活維持の必要性という、人と人を強固に結びつけてきた接着剤は弱まっています。そうであるならば、私たちは、目の前の関係をつなぎ止める接着剤を新たに用意しなければなりません。そこで私たちは、弱まってきた関係をつなぎ止める新たな補強剤として、つながりに大量の「［　X　］」を注ぎ込むようになりました。

このような傾向は、メディアからも読み取ることができます。日本映画界の巨匠、小津安二郎監督の作品に、『長屋紳士録』という短い映画があります。この映画は、終戦から二年後の一九四七年に公開されました。当時は、東京下町を舞台にした※人情劇と評価されています。簡単にあらすじを紹介しましょう。

おもな登場人物は、長屋の住人と少年です。物語は、長屋に住む女性のところに、実の親とはぐれてしまった子どもが届けられるところから始まります。そのさい、長屋のその他の住人とひと悶着あるのですが、結局、女性が少年の面倒を見ることになります。

最初は子どもの世話を嫌がっていた女性も、だんだんと情が移り、子どもをかわいらしく思ってきます。しかし、その矢先に、子どもを探していた実の親が登場し、女性と子どもの間に別れが訪れます。子どもが去った後、女性はあらためて親子のつながりのよさに気づく、というのが大まかなあらすじです。

長屋の住人は、鍵もかけず、お互いの家にしょっちゅう行き来をし、何かにつけ雑談をします。親子のつながりや、長屋の住人どうしの密接な交流。こういった言葉からは、「昔ながらの温かなつながり」を想像することができます。

［　Ⅰ　］、今の人びとが見ると、この映画に対してかなりの違和感を抱くでしょう。その理由は、登場する人びとの感情的な交流の少なさにあります。

人情劇であるこの映画のなかで、※スキンシップと言いうる場面は、少年が女性の肩をたたくシーン以外、いっさいありません。感情的な交流の少なさは、実の親と子どもの再会のシーンに集約されます。

物語のクライマックスである親子の再会、および、少年と女性との別れは、現在の感覚からすると、さぞ感動的に演出されるのではないかと思います。しかし、『長屋紳士録』において、そのような表現はまったくありません。再会を果たした親子は、互いに駆け寄ることも、抱き合うこともありません。それどころか親は、近寄る子どもを手で押しのけ、女性にお詫びと御礼の挨拶をすることを優先させます。［　Ⅱ　］、儀礼を優先しているわけです。

子どもと女性の別れのシーンでも、涙や抱擁はいっさい見られません。少年が「オバチャンサヨナラ」④とぶっきらぼうに述べ、別れのシーンは終わります。ここから、「人情劇」と言われた映画でさえも、感情表現は非常に乏しいことがわかります。

この映画を見た学生は、「［　Ⅴ　］」と述べていました。この言葉は、感情に満たされた今の人間関係をよく表しています。

しかし、感情に補強されたつながりは、それほど強いものにはなりません。私たちは、相手とのつながりを「よい」と思えば関係を継続させるし、「悪い」と思えば関係から退くこともできます。この特性のおかげで、私

たちは、無理して人と付き合わなくてもよい気楽さを手にしました。理不尽な要求や差別的な待遇から逃れやすくなったのです。しかし、人と無理に付き合わなくてもよい気楽さは、⑤つながりから切り離される不安も連れてきてしまいました。

お互いに「よい」と思うことで続いていくつながりは、どちらか、または、両方が「悪い」と思えば解消されるリスクがあります。放っておいても行き来がある長屋の住人とは違うのです。このような状況で関係を継続させるには、お互いに「よい」状況を更新してゆかねばなりません。つまり、つながりのなかに「よい」感情を注ぎ続けねばならないのです。

この特性は、その人にとって大事なつながりであればあるほど強く発揮されます。私たちは、大事なつながりほど「手放したくない」と考えます。しかし、あるつながりを手放さないためには、相手の感情を「よい」ままで維持しなければなりません。大事な相手とつながり続けるためには、関係からマイナスの要素を徹底して排除する必要があるのです。

とはいえ、個々人の心理に規定される「よい」状況は、社会に共有される規範ほどには安定していません。社会のルールはなかなか変わりませんが、個人の感情は日によって変わることもあります。何かの拍子に、ふと、「悪い」に転じてしまうこともあるのです。つまり、人と無理に付き合わなくても良いつながりは、ふとしたことで解消されてしまう不安定なつながりとも言えるのです。

かといって、目の前のつながりを安定させる※最適解は、そう簡単に見つかりません。人の心を覗くことはできませんから。

コミュニケーションの指南書が書店に並び、「コミュ力」や「コミュ障」といった俗語が流布する現状は、コミュニケーションにまつわる人びとの不安を物語っています。私たちは、人間関係を円滑に進めてゆく行動様式がはっきり見えないまま、相手の心理に配慮しつつ、コミュニケーションを行う厄介な状況にさらされているのです。

（石田光規『「人それぞれ」がさみしい　――「やさしく・冷たい」人間関係を考える』より）

※サークル……同じ興味や趣味を持つ人々の集まり。
※長屋……一棟を仕切って、数戸が住めるようにつくった細長い形の家。
※スキンシップ……肌と肌との触れあい。また、それによる心の交流。
※最適解……ここでは、最も適した答えのこと。

問1　――①「ある行為を『やらねばならない』と迫る社会」とは、どのような社会ですか。本文中から三十字以上三十五字以内で探し、最初と最後の五字をぬき出して答えなさい。

問2　――②「人と人を結びつける接着剤」とありますが、それは社会に合わせてどのように変化しましたか。それについて説明した次の文の空欄をそれぞれ指定された字数で答えなさい。ただし、Aは本文中からぬき出し、Bは本文中の言葉を用いること。

かつては［A（六字以上十字以内）］のために人と人とが結びついたが、今は［B（二十字以内）］によって結びついている。

問3　――③「このような社会」とは、どのような社会を指していますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　生きるためには最低限の人とのつながりが必要だが、日々の楽しみや余暇（よか）は一人でも十分満足できる、気楽な社会。

イ　生活のために、同じ集団に属する他者と協力して、ものを共有しながら生きていかなければならない、窮屈（きゅうくつ）な社会。

ウ　人とのつながりや集団の拘束（こうそく）力が弱いため、生きていくために人を害してもその罪から逃れることができる、無責任な社会。

エ　生活を安定させるために集団に拘束されることもなく、不愉快（ふゆかい）だと思えばいつでもその集団を抜け出せる、快適な社会。

オ　さまざまな人付き合いの機会が消えてしまったので、馬の合うような友人を簡単には見つけられなくなった、不安な社会。

問4　空欄［X］に入る適当な語を本文中から二字でぬき出して答えなさい。

問5　空欄［Ⅰ］・［Ⅱ］に入る適当な語をそれぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　ところで　　イ　しかし　　ウ　つまり　　エ　なぜなら　　オ　また　　カ　例えば

問6　――④「ぶっきらぼうに」の意味を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　冷ややかな様子で　　イ　怒りっぽい様子で　　ウ　意地悪な様子で　　エ　ぞんざいな様子で

オ　口下手な様子で

問7　空欄［Y］に入る文として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　昔のつながりは濃密だけど感情や気遣いが薄く、今のつながりは希薄だけど、感情や気遣いが濃い

イ　昔のつながりは温かいけれども感情表現が薄く、今のつながりは濃密だけど、感情や気遣いが薄い

ウ　昔は人と人との関係や感情表現も濃密だが気遣いに欠け、今の人間関係は冷たく、感情や気遣いも薄い

エ　昔はつながりが強いけれども感情表現に乏しく、今のつながりは温かいから、感情や儀礼も濃密だ

オ　昔はつながりが温かいから感情表現や儀礼も濃く、今のつながりは冷たいけれど、感情や儀礼が濃密だ

問8 ――⑤「つながりから切り離される不安」とありますが、なぜ不安になるのですか。四十字以内で答えなさい。

問9 次は、この文章を読んだあとの生徒の感想です。本文を正しく理解しているものを**二つ**選び、記号で答えなさい。

ア 気の合わない人や、苦手な相手との付き合いもうわべだけで済むから、昔の社会と比べたら今はずっと生きやすい世の中になったと思います。

イ 今は、相手に嫌なことをされたり、考えが合わないことに気づいたりしても、すぐに関係を断ち切れるので、生きていく上で何の不安もストレスも感じません。

ウ お互いに相手のことを好きだと思っていても、くだらないケンカやささいなすれちがいがきっかけで、簡単に友達ではなくなってしまうのだと不安に思いました。

エ 私と友だちは、いつも楽しく遊んでいるし、話が盛り上がらないことなんてありません。だから、私たちの友情は強い絆で結ばれていると思います。

オ 昔よりも人と人とのつながりが弱くなったから、理不尽な先輩の言うことを我慢して聞き続けたり、無理に友だちに合わせたりする必要が昔よりなくなったと思います。

三

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

中学三年生の時、いやいやながら参加した駅伝で、何かを真剣にやる楽しさを知った「俺」だったが、高校生になり、夢中になれるものもなく、日々をやり過ごしていた。二年生の夏、先輩に頼み込まれ、朝から夕方まで一歳十ヶ月の子ども、鈴香の面倒をみることになった。次の場面は、いつも遊びに来る公園で、鈴香が他の子どもたちと一緒に遊んでいる姿を「俺」が写真に撮っているところである。

「うわ、大田君じゃない」

夢中で写真を撮っていて気づかなかったのだろう。突然聞こえた、高くてふんわりした聞き覚えのある声に顔を上げると、①＿＿上原が後ろに立っていた。まさかと目をやると、グラウンドのほうでは中学生八人ほどが軽く走っている。この間たまたまいただけかと思ったら、またこの公園に駅伝練習にやって来たようだ。

「卒業以来じゃない？　こんなとこで会うなんてね。あ、どうも、こんにちはー」

上原はお母さんたちにも軽く会釈をした。

俺は喉が一気にからからになった。上原は駅伝を担当していたから、あのころの必死で走っていた俺を知っている。②＿＿今の俺の姿をどう思うだろうか。いや、そんなことより子どもを連れて公園にいることに驚くはずだ。上原にあれこれ聞かれるのは困る。今更、みんなに鈴香の身内ではないと知られるのは気まずい。俺は落ち着かない中で、「あ、ああ。駅伝練習かよ」と何とか口にした。

「そう駅伝。木曜日はこの公園を走ることが多いんだ。学校から坂を下って、緩(ゆる)い坂を上ってここへ出てくるでしょう？　ちょうどいい位置にあるし、ここのグラウンドも走りやすいし」

「へえ……。メンバー集まってんの？」

③「なんとか。八名だけどね」

上原が目をやるのに合わせて俺もグラウンドのほうを見てみる。体形も走り方もバラバラな生徒がもくもくと※流しをしている。

「今年はまじめそうなやつばっかだな」

「今は学校自体落ち着いてるしね。ヤンキーは足が速い子が多いから駅伝のときはいてもいいんだけど」

上原はそう笑った。

「ぶんぶー」

鈴香が、俺が話しているのに気づいて、何事かと近寄ってきた。俺のハーフパンツの裾(すそ)を引っ張りながら、仲間に入れろと主張している。

「うわあ。かわいいね。こんにちはー」

上原がそんな鈴香のほうに視線を落として微笑(ほほえ)むのに、かわいいと言われてご機嫌(きげん)になったのか鈴香は泥団子(どろだんご)を差し出した。

「あれ、くれるの？」

「どーじょ」

「うれしい。ありがと」

上原は鈴香の前にしゃがみ込んで、「おいしいね」と泥団子を食べるふりをした。

「いしー、ね」

鈴香がうれしそうに答えていると、

「お姉さん、おじさんの友達？」

と、愛ちゃんがやってきて、同じように泥団子を上原に渡した。

「ありがとう。みんな、和菓子屋さんみたいだね。って、大田君はおじさんなのに、私はお姉さんに見えるんだ。へへへ、やったね。でも、私は友達じゃなくて、このおじさんが中学校のときの部活の担当だったの。ほら、あっちで走ってるでしょう？　あんなふうにこのおじさんも走ってたんだよ」

上原はそう説明した。

上原は頼りなくてどうしようもない教師だった。不良の俺が学校でガムを噛んでいただけでやいやい言っていたかと思うと、授業を抜け出そうとするのを「追いかける体力ないから、自分で戻ってきてね」と平気で見送ったりするまぬけなやつだ。だけど、よけいなことにいちいち立ち入ってくるやつではなかった。俺が鈴香とどういう関係かということも、子どもたちと場違いな公園にいることも、なんとも思っていないようで、にこにこと泥団子をほおばるふりをしている。

「そんなの知ってるよねー」

「そう。おじさんすごく足速いんだよ。公園の中、ビューンって走るの」

愛ちゃんと由奈ちゃんが自慢げに言うのに、「やっぱりまだ走ってたんだね」と上原が言った。
「いや、別に走ってねえけど」
「あれ？　陸上部入ったって聞いたよ」
「もうやめたよ。つうか、高校生活なんてまともに送ってねえし」
「そうなの？」
上原は俺の顔を見て、目を丸くした。
「いやいやいや。俺見てみろよ。耳に穴開いてっし、髪も金色だろう？」
「それって、ＴＰＯに合わせてるだけでしょう」
「なんだよＴＰＯって」
「時と場所に合わせてるってこと。あんなヤンキーの吹き溜まりみたいな高校に行って、黒髪で制服着てたら逆に浮くもんね。二年生になったら後輩になめられるわけにもいかないだろうし。大田君、案外空気読むから」
相変わらずだな。さらりと失礼なことを言ってのけるこの無神経さ。
「まともなやつもいっぱいいる」
俺は和音※のことを思い出して、一応反論しておいた。
「そりゃそうだろうけど。だけど、大田君、タバコもやめたままみたいだし、体も顔も健やかそのものじゃない」
「それはそうだけど」
匂いや顔色でわかるのだろうか。確かにタバコも不健康なこともやってはいない。

「先生ー」
生徒たちが呼ぶ声が聞こえ、上原は軽く手を上げてグラウンドのほうに応えると、
「そうだ。ね、走らない？」
と俺に向かって言った。
「は？」
「久々に走ろうよ。ね」
「わー！　おじさんまた走るの？」
「すごい！　また乗っけてくれんの？」
俺が答える前に、由奈ちゃんと愛ちゃんが歓声を上げた。
「いや、走んねえし。ってか、肩車しねえから」
「えー。つまんない」
二人が口をとがらせるのに、鈴香も真似して横で「あーあー」とため息をついて見せる。④
「そう、つまんないよね。このおじさんとあの中学生たちで競走しようと思うんだけど、楽しそうでしょう？」
「うん見たい！」
由奈ちゃんと愛ちゃんが「見たい！　見たい！」と手を叩き、鈴香も横で「たい！　たい！」と叫びはじめた。まったくガキはなんでもすぐに盛り上がるから困る。
「なんか知らないけど、おもしろそうじゃない。走っておいでよ。鈴香ちゃん見とくからさ」

「そうだよ。みんなで応援するしね」
由奈ちゃんと愛ちゃんのお母さんも、ベンチから言った。
「本当ですか？　すみません、助かります。じゃあ、メニューは」
「いやいやいや、勝手に進めんなって」
俺が突っ込むのなんて気にもせず、上原は、
「タイムトライアル３０００、いや突然3キロはきついか。大田君、走ってるって言っても、3キロはないよね。1キロのタイムトライアル。それでいいよね？」
と勝手に提案した。
「いや、だからさ」
「あれ？　無理だった？　1キロくらいならなんとか走れると思ったんだけど」
「あんだよ。3キロ普通に走れっから」
そう言ってから、まんまと上原の口車に乗せられている自分に気づいた。
中学三年生のときも同じだった。駅伝練習に参加した初日、「最初からついていけないだろうから、大田君だけ別メニューね」と言った上原に反発して、俺はふらふらになりながら陸上部のやつらと同じメニューをこなしたんだった。
「じゃあ、3キロで。⑤二十分くらいで終わりますけど、いいですか？」
上原が聞くと、お母さんたちは「任せて」とうなずいた。

いつのまにか自分のペースに巻き込みやがって。突然中学生たちと3キロ走るって何なんだよ。かろうじてスニーカーは履いてるけど、ランニング用でもねえし、⑥ただ公園に遊びに来ただけなのに、どうしてこうなるんだ。俺は大きなため息をついた。

でも、やってみたかった。ちゃんと走ることに向き合ってるやつらに、まっとうな毎日を送ってるやつらに、どれくらい並べるのか。試してみたかった。

「決まりってことで。さ、大田君、行こう」

「あ、ああ」

無理やり参加させられた中学生の駅伝練習のときのように、俺は渋い顔を作ろうとしたけれど、お母さんや由奈ちゃんたちに「がんばってね」「鈴香ちゃんと応援してるよ」と言われて、素直に「はい」と答えるしかなかった。

「集まってー」

上原が声をかけると、生徒たちがバラバラと寄ってきた。

「今からタイムトライアルするんだけど、大田君にも参加してもらおうと思って」

上原が横にいる俺を手で示した。

⑦八人の生徒は、俺を一瞥しただけで、誰もうれしそうな顔はしなかった。そりゃそうだ。こいつらが一年生のときに俺は三年生だ。直接知らなくても、俺の悪い評判は聞いてるだろうし、こんなふざけた格好のやつと走

りたいわけがない。
「大田君だよ。知らないの？　部長は知ってるでしょう」
無反応のみんなを見渡して上原が言った。
「知ってますけど。僕が一年のときに駅伝に来ていたから」
崎山だ。俺が駅伝練習に参加してたときは、まだ一年生で補欠だった。こいつが部長になったのか。あのときは小さかったのに、今は俺より背が高く、すらりとした足にきれいな筋肉がついている。
「あ、なんか聞いたことがある。坊主にして走った人ですよね」
崎山の横で、落ち着きなくきょろきょろしていたやつが言った。こいつはまだ二年生だろう。ほんのわずかだけど、みんなより顔つきが幼い。
「そういえば本番は坊主だったかな。こないだみんなで試走に行ったでしょう？　あの上りの多い2区のコースを、大田君は最初の試走、10分ジャストで走ったんだよ。しかも、まだあんまり体動かしてなかったときに」
上原が言うのに、「うわ、すげえ」という声が漏れた。
「そう。すごいの。で、ブロック大会では9分48秒で区間二位。県大会では※篠山のコースを9分46秒で走ったんだ」
上原が掲げるタイムに、みんなの目の色が変わった。数字って説得力があるんだな。さっきまで軽く見られていたのに、一目置かれている。昔残した記録が、俺を救ってくれてるようだった。
「そんな人と走れるなんて光栄でしょう。めったにない機会だよ。十分後スタートするから、それぞれアップしてね」

上原がそう告げると、みんなは俺に負けられないとでも思ったのか、すぐさま体を動かしにかかった。
「おい。お前、どうして、記録覚えてんだ？」
「記録？」
みんなが散らばった後、声をかけると、上原が首をかしげた。
「試走とかの俺のタイムだよ」
「覚えてるって、最初の試走と本番だけだよ」
上原はあたりまえだという顔をした。
「へえ……」
こいつにもすごいとこがあるんだな。俺みたいなやつの記録まで覚えてるなんて。
「大田君もアップしとかないと、あとで体に来るよ」
上原はそう言うと、トラックの中の小石をのけ始めた。
「ああ、わかってる」
グラウンドの隅のほうに目をやると、砂場から移動してきた鈴香たちが陰に置かれたベンチに座ってこっちに手を振っている。母校の練習に参加するだけなのに、何かの大会のようだ。俺は手を上げて応えると、屈伸をして、軽いジョグを始めた。
今日走るのも駅伝と同じ距離の3キロ。昔の記録とあまりにもかけ離れた走りはしたくない。
「久しぶりだからだ」なんて言い訳をしないといけないような結果は残したくない。４００メートルトラックを

確かめるようにジョグをしている間に、体が目覚めてきた。最後に流しを入れると、手足の先までが高揚しているのがわかる。誰かとグラウンドを走る。俺の体はそのことにすっかり興奮していた。

「一分前だよー」

上原の声に、スタート地点にみんなが集まってきた。中学生たちはいつもの練習の一環だから平然としているけど、⑧俺の心臓は高鳴っていた。３０００のタイムトライアル。こいつらとのレースが始まるのだ。

（瀬尾まいこ『君が夏を走らせる』より）

※流し……リラックスして気持ちよいスピードで走るトレーニング。
※和音……「俺」のクラスメイト。
※篠山……兵庫県東部にある地名。

問１　――①「上原」とありますが、「上原」に対する「俺」の評価を説明した次の文の空欄を補うのに適当な語句を、本文中から指定された字数でぬき出して答えなさい。

中学生だった頃は［　A（十五字）　］だと思っていたが、久しぶりに話してみて、［　B（八字）　］と感じた。

問2 ――②「今の俺の姿をどう思うだろうか」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「今の俺の姿」とありますが、「俺」は具体的にはどのような姿をしているのか、二十字以内で答えなさい。

(2) 「今の俺の姿」を上原はどう思っていますか。それについて説明した次の文の空欄を補うのに適当な語句を十字以内で本文中からぬき出して答えなさい。

俺がそのような姿をしているのは、［　　］だけだと思っている。

(3) 上原が「今の俺の姿」をどう思っているかを知り、「俺」はどのように感じましたか。漢字二字で本文中からぬき出して答えなさい。

問3 ――③「なんとか。八名だけどね」とありますが、「俺」は、この「八名」から見ると、どのような関係になりますか。わかりやすく十字以内で答えなさい。

問4 ――④「ため息をついて見せる」とありますが、鈴香は何をしてもらうことを期待していたのですか。本文中よりぬき出して答えなさい。

問5　――⑤「二十分くらいで終わりますけど、いいですか？」とありますが、何について「いいですか？」と聞いているのですか。十五字程度で答えなさい。

問6　――⑥「ただ公園に遊びに来ただけなのに、どうしてこうなるんだ」とありますが、なぜそのように思っているのですか。四十字以上六十字以内で答えなさい。

問7　――⑦「八人の生徒は、俺を一瞥しただけで、誰もうれしそうな顔はしなかった」とありますが、「八人の生徒」が「俺」のことを見直したことがわかる部分を会話文以外のところから十二字でぬき出して答えなさい。

問8 ――⑧「俺の心臓は高鳴っていた」とありますが、それはなぜですか。理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　中学生とのレースの応援に来てくれている鈴香たちに、恥(は)ずかしい姿を見られてしまうのではないかという不安のため。

イ　ライバル心をむき出しにしてくる中学生と走り、昔の記録と同じくらいの結果を出さなくてはならないという緊張(きんちょう)感のため。

ウ　中学生とレースをすることで、俺の昔の格好良かった頃の姿を、鈴香たちに見せられるのではないかという期待のため。

エ　走ることをやめてしまった俺が、日々鍛(きた)えている中学生たちと、どこまで肩を並べて走れるのか試すことができる喜びのため。